

(1-95)

1. 矢守隆夫. アカデミアの立場からの新薬開発支援 がん支援・化学療法基盤支援活動の取り組み. 腫瘍内科. 2012;9(3):320-326.
2. 且慎吾, 矢守隆夫. PI3K-Akt-mTOR 経路とその阻害剤. がん分子標的治療. 2012;10(2):101-109.
3. 大橋愛美, 矢守隆夫. 膜小胞輸送にかかわる ADP リボシル化因子 1 の新規阻害剤 AMF-26 によるゴルジ装置の破壊と抗がん作用. 生体の科学. 2012;63(5):426-428.
4. 矢守隆夫, 大橋愛美. JFCR39 がん細胞パネルの活用による新たな抗がん剤創薬. 実験医学. 2012;30(7):1071-1077.
5. 且慎吾, 矢守隆夫. PI3K/mTOR 経路阻害薬 (西尾和人編「がん分子標的薬治療の現状と展望」2541-2547/2750 ページ). 東京: ライフ・サイエンス; 2011.
6. 矢守隆夫, 孔徳新. PI3 キナーゼを標的とした癌治療—PI3K 阻害剤開発の現状 (佐々木雄彦・横溝岳彦・竹縄忠臣編「分子から個体へと深化する脂質生物学」164-172/235 ページ). 東京: 羊土社; 2010.
7. 矢守隆夫, 孔徳新. キナーゼ阻害薬. 日本臨牀. 2010;68(6):1059-1071.
8. 矢守隆夫, 上原至雅, 吉田稔, 井本正哉, 清宮啓之, 水上民夫, 川田学, 長田裕之, 松浦正明. 特集・制がん剤の分子標的スクリーニング成績 「化学療法基盤情報支援班」報告・制がん候補物質のスクリーニング成績・第13報. 癌と化学療法. 2010;37:1-158.
9. 明石哲行, 矢守隆夫. プロテインチップを利用した抗がん剤の作用因子解析 (小田吉哉・長野光司編「創薬・タンパク質研究のためのプロテオミクス解析-バイオマーカー・標的探索、作用機序解析の研究戦略と実践マニュアル」175-181/227 ページ). 東京: 羊土社; 2010.
10. 矢守隆夫. PI3K-Akt-mTOR 経路. カレントセラピー. 2009;27(12):1157.
11. 矢守隆夫. 分子標的薬創薬に有用な Cancer Cell Informatics の構築と応用. 展望 Promising Vistas in Cancer Research. 2009;3:22-30.
12. 矢守隆夫. アカデミアの立場からの新薬開発支援 (西條長宏・西尾和人編「がん化学療法・分子標的治療 update」138-142/733 ページ). 東京: 中外医学社; 2009.
13. 矢守隆夫. 総論 分子標的薬の動向. 細胞 The CELL. 2009;41(9):354-355.
14. 矢守隆夫. 分子標的薬の基礎および研究動向 (山本重夫編「バイオ医薬の開発技術とシーズ」3-11/384 ページ). 東京: シーエムシー出版; 2009.
15. 矢口信一, 生田目奈知, 矢守隆夫. 癌領域における PI3 キナーゼ阻害剤の開発. Medical Science Digest. 2009;35(5):30-35.
16. 山崎佳波, 矢守隆夫. ヒトがん細胞パネルによる分子標的薬スクリーニング (日本がん分子標的治療学会編「がん分子標的治療研究 実践マニュアル」53-58/329 ページ). 京都: 金芳堂; 2009.
17. 孔徳新, 矢守隆夫. PI3K 阻害剤開発の現状. 細胞 The CELL. 2009;41(9):372-376.
18. 矢守隆夫. Cancer Cell Informatics の活用と分子標的薬の探索評価. Mebio Oncology.

2008;5(1):18-28.

19. 矢守隆夫. がん分子標的研究の基盤となる *Cancer Cell Informatics*. *MEDCHEM NEWS*. 2008;18(3):23-27.
20. 矢守隆夫. 癌細胞に関する増殖因子の測定法 (日本がん転移学会編「がん転移研究の実験手法」205-208/362 ページ). 京都: 金芳堂; 2008.
21. 明石哲行, 矢守隆夫. プロテオミクスによる薬剤感受性の検討. *腫瘍内科*. 2008;2(2):130-135.
22. 且徳吾, 矢守隆夫. *Cancer Cell Informatics* と分子標的薬剤 (鶴尾隆編「がんの分子標的治療」17-22/441 ページ). 東京: 南山堂; 2008.
23. 孔徳新, 矢守隆夫. PI3K の新しい阻害剤. *生体の科学*. 2008;59(6):541-547.
24. 矢守隆夫, 安藤俊夫, 上原至雅, 小野眞弓, 河野通明, 済木育夫, 内藤幹彦, 早川洋一, 鶴尾隆, 吉田稔, 杉本芳一, 馬島哲夫. 特集・制がん剤の分子標的スクリーニング成績 「新しい戦略による抗がん剤のスクリーニングのための委員会」報告・制がん候補物質のスクリーニング成績・第 11 報. *癌と化学療法*. 2007;34:1-111.
25. 矢守隆夫, 上原至雅, 吉田稔, 井本正哉, 清宮啓之, 水上民夫, 川田学, 長田裕之, 松浦正明. 特集・制がん剤の分子標的スクリーニング成績 「化学療法基盤情報支援班」報告・制がん候補物質のスクリーニング成績・第 12 報. *癌と化学療法*. 2007;34:112-144.
26. 矢守隆夫. 分子標的治療薬とは. *月刊薬事*. 2007;49(12):1819-1824.
27. 矢守隆夫. *Cancer Cell Informatics* とケミカルバイオロジー. 蛋白質 核酸 酵素. 2007;52(13):1690-1695.
28. 矢守隆夫. 分子標的治療薬. *クリニカル プラクティス*. 2007;26(3):231-232.
29. 矢守隆夫. 分子標的治療薬の開発と発展. *日本病院薬剤師会雑誌*. 2007;43(1):63-67.
30. 矢口信一, 矢守隆夫. 新規 PI3 キナーゼ阻害剤 ZSTK474 の抗がん活性. *細胞 The CELL*. 2007;39(9):22-26.
31. 矢守隆夫. 分子標的療法の開発と発展. *血液フロンティア*. 2006;16(9):21-28.
32. 矢守隆夫. 分子標的治療薬のオーバービュー. *Drug Delivery System*. 2006;21(1):18-23.
33. 矢守隆夫, 志和美重子. プロテオミクスによる大腸癌マーカーの探索. *GI Research*. 2005;13(2):115-121.
34. 矢守隆夫. 代表的な代謝拮抗薬を列挙し、作用機序を説明できる. (日本薬学会編「薬と疾病 III薬物治療(2)および薬物治療に役立つ情報」104-106/316 ページ). 東京: 東京化学同人; 2005.
35. 矢守隆夫. 代表的な抗悪性腫瘍薬の基本構造を示すことができる. (日本薬学会編「薬と疾病 III薬物治療(2)および薬物治療に役立つ情報」101-103/316 ページ). 東京: 東京化学同人; 2005.
36. 矢守隆夫. 代表的な抗悪性腫瘍薬を列挙できる. (日本薬学会編「薬と疾病 III薬物治

療(2)および薬物治療に役立つ情報」98-100/316 ページ) . 東京: 東京化学同人; 2005.

37. 矢守隆夫. ランダムスクリーニングから target-based スクリーニングへ (西條長宏編「癌治療の新たな試み 医薬ジャーナル 新編Ⅲ」36-53/798 ページ) 2005.
38. 中津則之, 矢守隆夫. 抗がん剤応答性の予測におけるマイクロアレイ解析. *JBiotherapy*. 2005;19(4):303-309.
39. 矢守隆夫, 安藤俊夫, 上原至雅, 小野眞弓, 河野通明, 済木育夫, 内藤幹彦, 早川洋一, 鶴尾隆, 杉本芳一, 馬島哲夫. 制がん剤の分子標的スクリーニング成績-わが国における制がん剤候補物質のスクリーニング成績・第 10 報-. 癌と化学療法. 2004;31 1-150.
40. 矢守隆夫. がん細胞パネルによる化合物評価とその分子標的スクリーニングにおける役割. 癌と化学療法. 2004;31(April):485-490.
41. 矢守隆夫. *Cancer Cell Informatics* と抗がん剤探索. *Jpn J Clin Pharmacol Ther*. 2004;35(2):329S-330S.
42. 矢守隆夫. 癌分子標的と創薬スクリーニング. 現代医療. 2004;36(7):1339-1346.
43. 矢守隆夫. *Cancer Cell Informatics* -抗がん剤探索とポストゲノム研究への応用-. バイオサイエンスとインダストリー. 2004;62(7):445-449.
44. 矢守隆夫. *Cancer Cell Informatics* と抗がん薬検索. 臨床医薬. 2004;20(9):913-918.
45. 中津則之, 矢守隆夫. ヒトがん細胞パネルによる化合物の分子薬理の評価と抗がん剤感受性関連遺伝子. がん分子標的治療. 2004;2(4):310-316.
46. 鶴尾隆, 矢守隆夫, Shoemaker R. 分子標的治療薬の開発戦略. がん分子標的治療. 2003;1(3):7-15.
47. 矢守隆夫. 抗がん剤スクリーニングの変遷. 化学療法の領域. 2003;19, S-1:16-21.
48. 矢守隆夫. がん細胞パネル -抗がん剤 探索およびポストゲノム研究における活用-. 3 ed. 東京: 癌と化学療法社; 2003.
49. 矢守隆夫. がん細胞パネルインフォーマティクス - 分子標的治療薬探索と感受性診断への応用. *Drug Delivery System*. 2003;18(4):385-393.
50. 矢守隆夫. ケモカインとがん転移. 日本臨床. 2003;61(増刊号 8):116-122.
51. 矢守隆夫. *Cancer Cell Informatics* による制癌剤のスクリーニング. *Surgery Frontier*. 2003;10(3):304-312.
52. 矢守隆夫. ヒストン脱アセチル化酵素阻害剤. *Surgery Frontier*. 2003;10(4):56-57.
53. 且慎吾, 矢守隆夫. がん化学療法感受性と遺伝子発現. 分子細胞治療. 2003;2(4):378-384.
54. 且慎吾, 矢守隆夫. 遺伝子発現情報を用いた抗がん剤感受性予測. 血液・腫瘍科. 2003;47(6):575-581.
55. 矢守隆夫, 安藤俊夫, 上原至雅, 小野眞弓, 河野通明, 済木育夫, 内藤幹彦, 早川洋一, 鶴尾隆, 杉本芳一, 清宮啓之, 馬島哲夫. 制がん剤の分子標的スクリーニング成績-わが国における制がん剤候補物質のスクリーニング成績・第 9 報-. 癌と化学療法. 2002;29 Suppl.

II(March):225-415.

56. 矢守隆夫, 安藤俊夫, 上原至雅, 小野眞弓, 河野通明, 済木育夫, 内藤幹彦, 早川洋一, 鶴尾隆, 杉本芳一, 清宮啓之, 馬島哲夫. 制がん剤の分子標的スクリーニング成績-わが国における制がん剤候補物質のスクリーニング成績・第 8 報-. 癌と化学療法. 2000;27 Suppl. I(Suppl. D):1-192.
57. 矢守隆夫. 分子標的薬剤のバイオインフォーマティクス. 現代医療. 2000;32(10):2453-2460.
58. 矢守隆夫, 竹田和由. 増殖因子、サイトカインによる癌細胞増殖促進 癌と化学療法. 1999;26(8):1209-1213.
59. 矢守隆夫. 抗癌剤開発・基礎—ヒト培養がん細胞パネルによるスクリーニングを中心に. 2 ed. 東京: 癌と化学療法社; 1999.
60. 矢守隆夫. がん転移の臓器親和性を決定する因子の解析. がん治療のあゆみ. 1999;18:93-101.
61. 矢守隆夫, 上原至雅, 安藤俊夫, 河野通明, 済木育夫, 小野眞弓, 稲葉実, 杉本芳一, 清宮啓之, 鶴尾隆. わが国における制がん剤候補物質のスクリーニング成績・第 7 報. 癌と化学療法. 1998;25 Suppl. II(Suppl. II):147-392.
62. 矢守隆夫. 増殖因子: 癌転移の臓器親和性とのかかわり. 初版 ed. 東京: 医薬ジャーナル社; 1998.
63. 矢守隆夫. 臓器微小環境と癌転移. 実験医学. 1998;16(16):2063-2068.
64. 矢守隆夫. 消化器癌の転移における宿主因子の意義. *Frontiers in Gastroenterology*. 1998;3(4):378-384.
65. 矢守隆夫. ヒト培養癌細胞パネルによるスクリーニング. 癌と化学療法. 1997;24(2):129-135.
66. 矢守隆夫. *in vivo* 実験転移モデルの発展. *Biotherapy*. 1997;11:1003-1010.
67. 矢守隆夫, 浅野間敬子, 島田耕次. 臓器親和性を決定する宿主因子. 1 ed. 東京: 羊土社; 1996.
68. 矢守隆夫, 山崎佳波, 島田耕次, 桑島成夫. 手術侵襲による肝転移増大モデル. 侵襲と免疫. 1996;5(3):87-89.
69. 矢守隆夫, 小見明子. スクリーニング. 1 ed. 東京: 中外医学社; 1996.
70. 矢守隆夫. 臓器特異的転移の分子機構. 1 ed. 東京: 中外医学社; 1996.
71. 矢守隆夫. 肝転移と肝由来増殖因子. 肝胆膵. 1996;33(2):153-157.
72. 矢守隆夫. 肝細胞の産生するがん細胞増殖促進因子—その肝転移への関与. *Biotherapy*. 1996;10(October):1353-1358.
73. 小見明子, 矢守隆夫. 抗がん剤スクリーニングの新手法. 化学と薬学の教室. 1996;No.122:24-29.
74. 稲葉実, 佐藤重男, 吉村マサミ, 大西保行, 矢守隆夫, 田代田鶴子. ノードマウス移植

ヒト胃癌に対する Doxifluridine, Pirarubicin および Cisplatin の 3 剤併用療法. 22 癌と化学療法. 1995;22(12):1793-1798.

75. 矢守隆夫. 世界における転移モデル動物実験の総括. 実験医学. 1994;12(8):1060-1064.
76. 矢守隆夫. 経脾モデル. 1 ed. 京都: 金芳堂; 1994.
77. 矢守隆夫. 転移性がん細胞株の樹立法. 1 ed. 京都: 金芳堂; 1994.
78. 矢守隆夫. 癌細胞の増殖因子への感受性の測定法. 1 ed. 京都: 金芳堂; 1994.
79. 鶴尾隆, 矢守隆夫. 転移に関与する癌細胞の血小板凝集因子と増殖因子. *Oncologia*. 1993;26(2):21-26.
80. 矢守隆夫, 鶴尾隆. 高転移性細胞におけるインスリン様増殖因子 I (IGF-I) のシグナル伝達. 癌と化学療法. 1993;20:393-398.
81. 矢守隆夫, 島田耕次. 転移に関係する増殖因子. 臨床科学. 1993;29(9):1119-1124.
82. 矢守隆夫. ヒト培養癌細胞パネルによるスクリーニング: 中外医学社; 1993.
83. 矢守隆夫. 臓器選択的転移の分子レベルでの裏付け. 細胞工学. 1992;11:48-56.
84. 矢守隆夫. 臓器特異的転移と増殖因子. *Mebio*. 1992;9:37-44.
85. 矢守隆夫, 鶴尾隆. 癌転移と増殖因子. 蛋白質・核酸・酵素. 1991;36(7):438-443.
86. 矢守隆夫. 癌転移阻害物質の検索. 続医薬品の開発 (名取俊二、中西義信編). 1991;7:135-153.
87. 小川一誠, 矢守隆夫. 新抗がん剤と転移抑制剤一日米癌共同セミナーより. 癌と化学療法. 1991;18(4):671-674.
88. 矢守隆夫. 癌転移を抑える遺伝子はあるのか?. 蛋白質 核酸 酵素. 1990;35(3):53-54.
89. 鶴尾隆, 矢守隆夫. 増殖因子と癌転移. *Biomedica*. 1989;4:471-175.
90. 鶴尾隆, 矢守隆夫. 癌転移と増殖因子. 癌と化学療法. 1989;16:3374-3378.
91. 矢守隆夫, 鶴尾隆. 転移巣における増殖因子. 実験医学. 1989;7:551-557.
92. 矢守隆夫, 入村雄郎. 癌転移研究の進歩-糖鎖抗原との関連. *ファルマシア*. 1989;25:449-454.
93. 入村達郎, 矢守隆夫, 松下能文. 糖鎖抗原と癌転移. 実験医学. 1988;6:1049-1055.
94. 入村達郎, 矢守隆夫. がん転移研究の推移-アメリカ癌学会印象記. *Oncologia*. 1986;18(AUTUMA):1-3.
95. 矢守隆夫. 臓器特異性転移株の選別. 日本医師会雑誌. 1985;93:211-216.